

社団法人

日本ウエイトリフティング協会  
60年史

## 第一部

# 日本協会の歩み

# 日本協会の歩み

## 〈前 史〉

昔から石や米俵を使った「力くらべ」が盛んであったことが、卵形の玉石が現在全国各地の神社の境内などで散見できることからうかがい知ることができる。この玉石を「力石」「さし石」といい、当時の青・壮年達が心身の鍛錬や、力くらべのため使用したもので、現在のバーベルに変わるものである。

現在使用されているようなバーベルが、いつ頃からわが国に入ってきたかという確かな記録はないが、明治の終わりから大正期にかけて外人達がトレーニングに使用している様子を見たという証言もある。

江戸時代より差し石や俵差しを受けついできたグループの一人である飯田一郎の話によると、昭和6年頃同氏が神田の古本屋で英文のウエイトリフティング書を発見、それをもとにバーベルを製作したのが、わが国最初のバーベルであるという。当時、東京神田川近くで運搬業を手広く営んでいた飯田一郎の叔父である飯田徳蔵を中心とした力自慢たちは、力石や米俵の代わりにこのバーベルを使って大いに腕を競いあったのである。

昭和7年12月、朝鮮中央体育研究所の除相天より、第2回全朝鮮力道大会に飯田徳蔵、若木竹丸、飯田一郎の

3人が招待された。朝鮮ではすでに大正15年に京城花洞にウエイトリフティングの組織ができていたのである。

若木は、当時、怪力者として世間一般に知られていたが、朝鮮での初めての正式種目、P、S、Jを行ったため成績はよくなかった。

しかし飯田徳蔵はPで195ポンドを挙げて1位となった。

## 〈沿 革〉

### 昭和8年(1933)

国外にオリンピック、内に国民体育大会を提唱した嘉納治五郎IOC委員が、この年のウィーン会議の帰途、バーベルを購入、競技の普及発展に努めることになった。同氏はこれを東京代々木にあった文部省体育研究所の備品として、大谷武一技師に競技方法を研究させたのである。

### 昭和9年(1934)

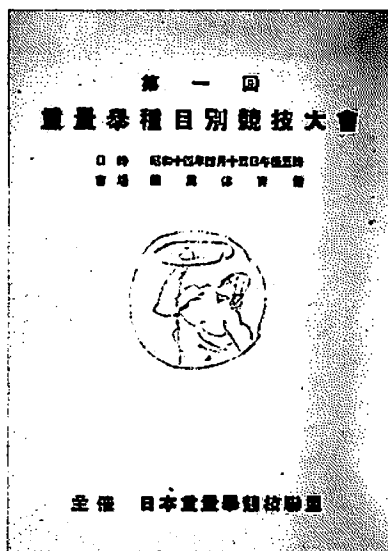
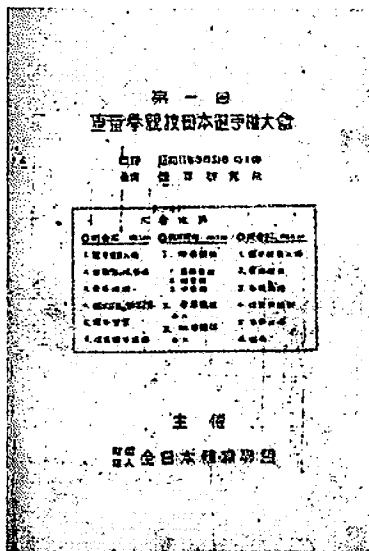
この年の3月、オーストリアから購入した国際基準のバーベルが、2個の荷物となって研究所に運ばれ、大谷技師の下で体育研究に従事していた安東熊夫が人体解剖をなす如き緊張のなかで解いたと、後年、書簡にしたためている。安東熊夫は、仏文が原本であった重量拳競技法の翻訳にあたり、4月28日の全国体育運動主事会議で、解説と実技を男女の川関とともに紹介した。

その頃、わが国のスポーツ界は、2年後に迫ったベルリン・オリンピックに向けられ、NOCとしての大日本体育協会には、種目別オリンピック競技のルールブックが届き、重量拳競技については体育研究所に送られてきた。安東はこのルールの翻訳にも取り組み、昭和11年5月にルールが完成し、公表した。

### 連盟の創立

### 昭和11年(1936)

5月2日、東京YMCAで東京市選手権大会が、わが国初の競技会として開かれた。この年の5月



プログラム・昭和11年5月3日

# 南選手、押舉と牽舉に 待望の世界記録實現

## 全日本重量舉選手権第二日



勝利たし出を我記界世家が守選手

南選手が、押舉、牽舉に、それぞれ、世界記録を樹立した。この日は、全日本重量舉選手権大会の第二日。南選手は、これまで、日本代表として、国際大会に何度も出場しているが、今回、ついに、期待されていたとおり、世界記録を樹立した。これは、日本初の世界記録である。南選手は、この記録を樹立したことで、国際重量舉連盟に加盟申請した。加盟国となっていたため、日本初の公認記録として、翌年3月20日、国際連盟の承認を得た。

十四四年二月二日 (日付不明)

種目	選手名	重量	種目	選手名	重量
1	南寿逸	155.0	1	南寿逸	155.0
2	南寿逸	130.0	2	南寿逸	130.0
3	南寿逸	97.5	3	南寿逸	97.5
4	南寿逸	72.5	4	南寿逸	72.5
5	南寿逸	52.5	5	南寿逸	52.5
6	南寿逸	37.5	6	南寿逸	37.5
7	南寿逸	22.5	7	南寿逸	22.5
8	南寿逸	7.5	8	南寿逸	7.5

昭和13年12月19日付

# 種目別重量舉

A16種目別重量舉し等て初大会販ふ

種目別重量舉の大会が開催された。この大会では、種目別の重量挙げが行われ、選手たちはそれぞれ自分の得意な種目で競った。大会は、選手たちの活躍が注目され、観客も大勢集まった。大会の結果、各選手が自分の実力を発揮し、好成績を挙げた。大会を通じて、選手たちは技術を磨き、自己ベストを更新した。大会は、選手たちの成長の機会となり、今後の大会に向けたモチベーションを高めた。大会は、選手たちの努力と才能が光る素晴らしい大会であった。



昭和14年4月16日付

31日、全日本体操連盟主催の下に、第1回全日本重量舉競技選手権大会が、遠来の韓国より金容星、金晟集の2選手を迎え、6名の日本選手とともに代々木の体育研究所で開催された。この日、日本重量舉連盟が結成された。第1回大会後、大谷武一は第11回オリンピック大会(ベルリン大会)に体操競技総監督として参加、重量舉競技を視察した。この年第12回オリンピック東京大会が決定、わが国スポーツ界は活気に溢れた。重量舉も統括団体の必要に迫られ、全日本体操連盟から独立した組織として、全日本体操連盟の平沼亮三会長、大谷武一副会長、中園進等の各氏が発起人代表となる。

### 昭和12年(1937)

全日本体操連盟から独立創立された日本重量舉連盟は、9月29日東京・京橋中央亭で発会式を挙行政した。この日、全日本体操連盟平沼亮三会長より、三島通陽子爵を会長に、大谷武一副会長、中園進・下津屋俊夫外を委員に、朝岡正夫、安東熊夫を主事に委嘱し、事務所を文部省国民体育館(神田)内に置くこととした。11月2・3日行なわれた第9回明治神宮大会は第2回全日本選手権大会を兼ねて、東京神田の国民体育館において、全日本体操連盟との共催で開催した。

この年、連盟は競技規則並びに解説書を刊行する。

### 昭和13年(1938)

この年、大日本体育協会に加盟、12月に開催された第

3回全日本選手権大会(国民体育館)で、当時日本に併合された朝鮮の南寿逸がFe級でP.Sの世界記録を樹立した。

この年、国際重量舉連盟に加盟申請し、加盟国となっていたため、日本初の公認記録として翌14年3月20日国際連盟の承認を得た。

### 昭和14年(1939)

第4回全日本選手権大会では南寿逸がFe級で3種目の世界記録を樹立し、翌年1月18日付で国際連盟公認となる。この年、俵差持久及び回数競技、さし舉回数競技規定を制定する。

また、第1回重量舉種目別大会が国民体育館で開催された。

### 昭和15年(1940)

6月30日、京都府重量舉連盟発会式が挙行政された。第5回全日本選手権大会は、扛拳競技、府県対抗俵差持久競技の各大会を開催する。

昭和12年、日華事件が大東亜戦争に拡大、13年にはオリンピック東京大会が返上、昭和17年、これまでの大日本体育協会は発展的に解消して大日本体育会と改称し、戦時即応の体制に組替えとなった。重量舉もレスリング、ボクシングと合体して重技部と改称した。そして、第二次世界大戦勃発によって連盟は解散、全日本大会も5回を重ねたに留まり、第6回大会は終戦を待つことになった。

## 〈年次別概況〉

### 戦後の再建

#### 昭和21年(1946)

戦後の組織の復活は、秋に行われる第1回国民体育大会への参加の必要性から、井口幸男(理事長)を中心に会長三島通陽、理事に野口岩三郎、遠藤滝軌、内田次郎、欽守尊邦のメンバーで3月に再出発し、ウェイトリフティング協会と改称した。そして第1回国民体育大会京都大会に参加、これは第6回全日本選手権大会を兼ねて開催されたが、出場選手はわずか12名に過ぎなかった。国民体育大会種目競技団体となった協会は、開催県に支部をつくることに努め、回を重ねるに従い参加者も増加していったのである。

#### 昭和22年(1947)

第2回国民体育大会を石川県で開催、第7回全日本選手権大会も兼ねて実施した。この国体では、火えんの国体マークが制定され、これを描いた大会旗が掲揚された。

#### 昭和23年(1948)

憲法発布を祝う記念演技会が神宮競技場で開催され、天皇皇后両陛下および各宮殿下の前での御前演技に、重量挙げは20分間の時間が与えられた。敗戦直後のことで、選手を集めることが容易でなかったが、飯田定太郎(飯田徳蔵の子息)、飯田勝康、安立勉・節の両君、関口正夫の5選手が演技に参加、井口幸男の説明役で協会史上初の栄誉に浴したのである。

#### 昭和24年(1949)

第3回国民体育大会は、東京都で開催、全日本大会も第9回大会として実施した。この国体は、神宮外苑ラグビー場で夜の開会式を挙行、両殿下、初の国体お成り、天皇からお言葉を賜る。この頃アメリカの占領政策の一つとして農地法が制定され、戦前貴族院議員で子爵であった資産家の三島会長も土地を全部手離すことになり、この年、会長職を辞任、後任に愛媛県出身の衆議院議員小西英雄が第2代会長として就任したのである。

#### 昭和25年(1950)

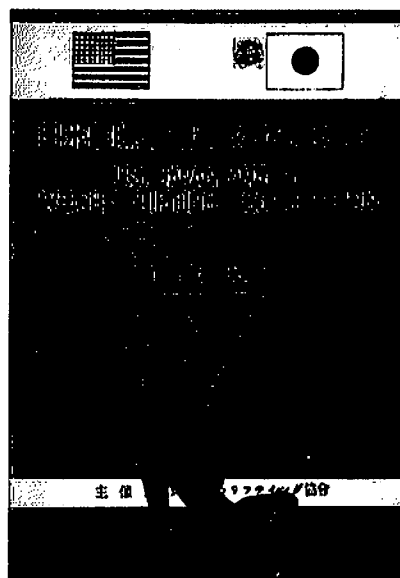
小西会長を迎え、本協会は国際ウェイトリフティング連盟(IWF)に再加盟申請を行い、同年10月加盟承認を受けた。

#### 昭和26年(1951)

第1回アジア競技大会がインド・ニューデリー市で開催され、わが国は初めて国際競技会に参加した。参加選手は、井口幸男(Fe級)、窪田登(L級)で共に第3位入賞を果たした。協会は同年、国際交流競技会を企画、アメリカ連盟に要請し、10月にハワイチーム(監督以下5人の選手)を招き、H米最初の国際親善試合を開催、翌27年には日本代表5選手がハワイに遠征した。

#### 昭和27年(1952)

戦後16年ぶりにオリンピック大会に参加できるように



昭和26年10月11日・日米親善大会プログラム

なった日本は、ヘルシンキの第15回オリンピック大会へ選手団を派遣した。オリンピック初参加のウェイトリフティングは、愛媛県の白石勇(B級)がコーチなしで単身参加したが、試合途中けいれんを起し棄権した。

#### 昭和28年(1953)

これまで国民体育大会に兼ねて実施していた全日本選手権大会が分離独立し、この年、愛媛県で開催した。競技の普及活動として、日本の将来を踏まえ、高校組織の結成・競技会の開催並びに全国高体連加盟に向け、諸準備に入る。

#### 昭和29年(1954)

5月の第2回アジア大会に監督1、選手5名が参加、前回大会に続き2位1名、3位3名の成績をあげた。この年、協会主催による高校選手権大会を全日本選手権に兼ねて徳島県で開催した。また、全日本学生連盟も結成されるに至り、ようやく競技の普及段階に入った。

#### 昭和30年(1955)

2代小西英雄会長の辞任後、大谷米太郎会長を迎えた。大谷会長は富山県出身の相撲さんあがりの大実業家で、当時東京一といわれたホテル・ニューオオタニを建設した方でもあった。この年、全日本学生連盟が第1回全日本学生選手権大会を開催、日本のウェイトリフティング界の一翼を担うようになった。

#### 昭和31年(1956)

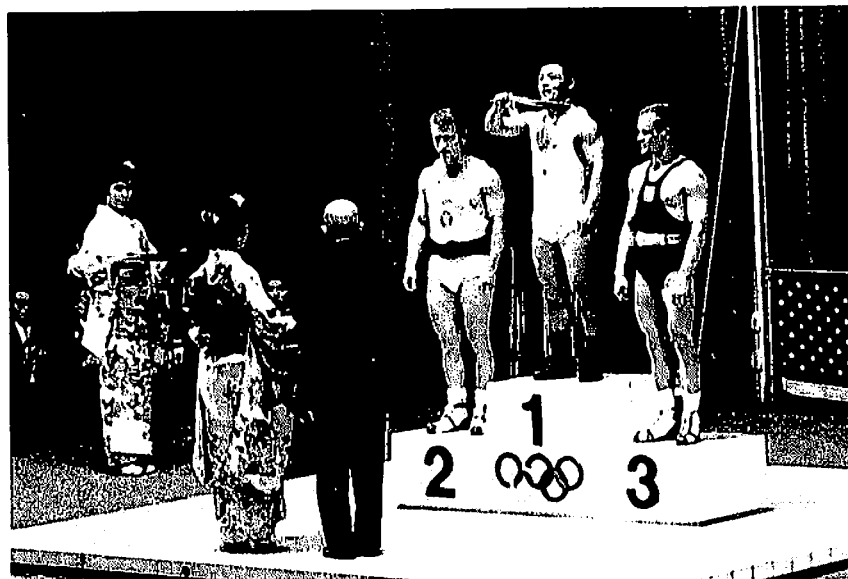
第16回オリンピック大会がメルボルンで開催され、井口幸男監督以下5名の選手が参加、大沼賢治(L級)が4位、白鳥博義(Fe級)が5位、南部良雄(B級)6位と初のオリンピック入賞を果たした。協会組織にあっては、3代大谷会長が1年余で辞任、協会評議員会の承認を経て、衆議院議員の加藤高蔵氏を4代会長として迎えた。

#### 昭和32年(1957)

中華人民共和国の体育総会から招待を受け、協会はこの年の夏、中国の各都市に遠征して日中友好試合を行っ



昭和33年5月10日発行・協会機関紙



東京オリンピック・フェザー級表彰・優勝の三宅義信

た。また、イランのテヘラン市で開催された世界選手権大会に学生連盟が主体となってわが国初の参加となった。この年、4代会長が辞任、1年後に迫った第3回アジア大会東京大会を控え、当時東京で景気よかつた南相織維の川名社長に相談、氏が会長代わりを務めるといふことで、協会第5代川名勇会長が決定した。

#### 昭和33年(1958)

東京の国立競技場体育館で5月25日から28日まで第3回アジア競技大会が開催された。日本は8名の選手がエントリーし、B級の本暮茂夫が325kgでアジア記録保持者であるイランのナムジョを破り優勝した。高体連に加盟申請していた協会は、12月2日開催の全国高体連理事会において加盟が承認され、翌34年4月正式加盟となる。

#### 昭和34年(1959)

川名会長の辞任に伴い、後任に矢下春蔵第6代会長が誕生したが、数ヶ月の任期で辞任。この年、IOC総会で1964年第18回オリンピック大会の東京開催が決定、日本スポーツ界は一段と活気に満ちた。そんな中、矢下会長辞任後の空白を埋めるべく、第7代会長として西川正一氏を迎えるに至った。第14回国民体育大会(東京)でB級三宅義信がS107.5kg、L級で山崎弘がJ160kgの世界記録を樹立した。日本人による初の世界記録であった。

#### 国際舞台での活躍

#### 昭和35年(1960)

第17回オリンピック大会(ローマ)でB級の三宅義信が2位の銀メダルでオリンピック初めてのメダリストとなった。そのほか2人が入賞を果たし、日本にとってオリンピック有望種目の一つに加わったのである。

大会直前に開かれたIWF総会において、日本協会の京極高鋭がIWF副会長に選出された。国内にあっては、第15回国民体育大会(熊本)で高校の部が新設された。また、第7回全国高等学校総体(富山)から優勝校の持ち回

りとして高松宮殿下賜旗が授与された。その後、益々隆盛を極め、多くの優秀リフターを輩出し、競技の伸展に寄与したのである。

#### 昭和36年(1961)

ウィーンで開かれた世界選手権大会においてB級に挑戦した三宅義信は、3位銅メダルを獲得。2年後に迫った東京オリンピック大会を控え、協会は選手強化と大会運営の準備に傾注された。

#### 昭和37年(1962)

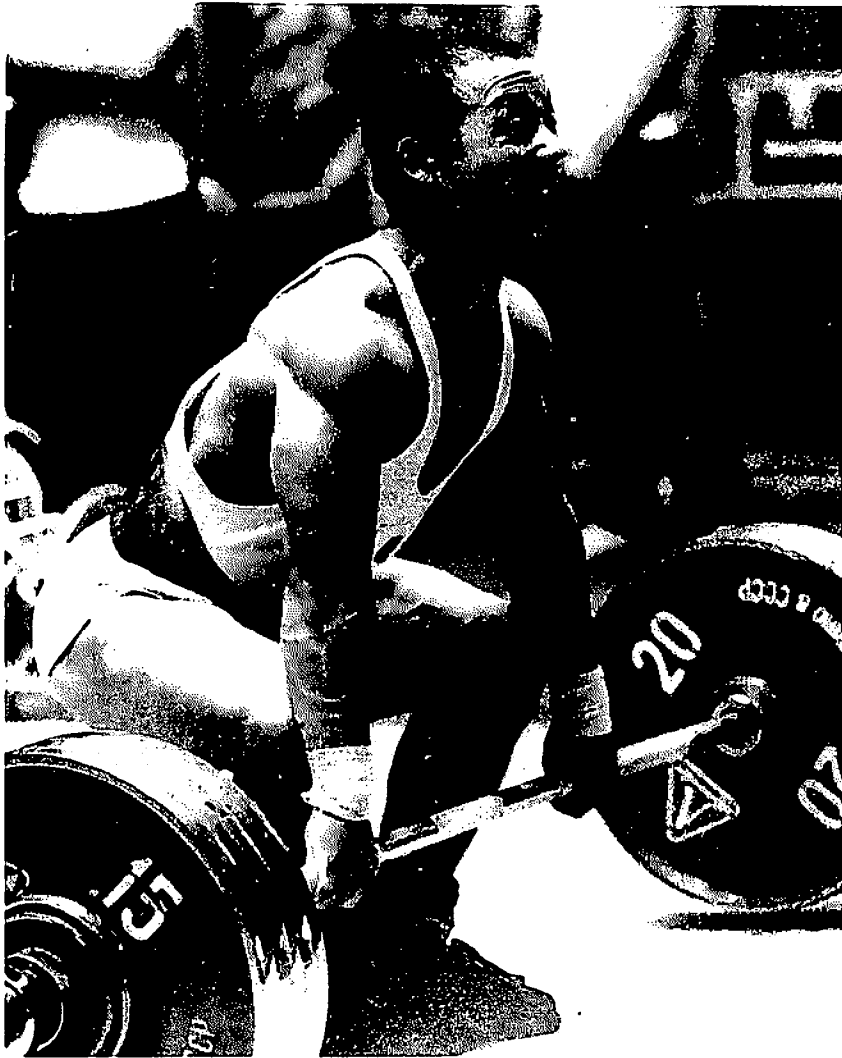
ブタペストで開催の世界選手権大会で日本待望の金メダルを、B級に出場した三宅義信が獲得、日本に初めての優勝をもたらした。第4回アジア大会は、インドネシアのジャカルタ市で開催、日本代表選手団として参加したウエイトリフティングは7名の選手を派遣。しかし、ホスト国であるインドネシアが、イスラエル・台湾を不参加ならしめたことが問題となり、ウエイトリフティング競技は、IWFジョンソン会長の訪インドネシアで、大会に参加した国はIWF加盟国から除名する旨の最終通告があり、ウエイトリフティング競技は中止を余儀なくされたのである。

#### 昭和38年(1963)

オリンピックの前年、プレオリンピック(東京国際スポーツ大会)が東京世田谷区で開催。アメリカ、ハンガリー、ポーランドの世界トップリフターを招待し、日本選手権も兼ねて実施した。また、同年開催の世界選手権大会(ストックホルム)で三宅義信がFe級で優勝、三宅は国内外とも安定した実力を発揮し、B、Fe級の両級で三宅時代をつくる。国内にあっては、第1回全日本社会人選手権大会が東京YMCAで実施されるに至った。

#### 昭和39年(1964)

アジアで初めて開催された第18回オリンピック大会、日本は7名の選手が4階級に出場、三宅は、国民注視のなか、期待通り見事に優勝、君が代吹奏のなか中央ポー



オリンピック・メキシコ大会フェザー級三宅義行

ルに日章旗を掲げた。そして、選手全員が6位以内に入賞という快挙を成し遂げたのである。大会運営においては、赤嶺茂(理事長)らが中心となって、長年の準備のなかで、関係団体、学生諸君の支援、役員を動員し、盛會裡に全競技日程を終了した。

#### 昭和40年(1965)

テヘランの世界選手権大会では、Fe級で三宅(兄)が連続優勝、B級で一ノ関史郎が2位、三宅(弟)が3位銅メダルを獲得し、世界の舞台でその実力を遺憾なく発揮した。日韓交流の橋渡し、韓国連盟の李哲承会長(韓国国会議員)と井口副会長とで東京において話し合いが行われ、両国の親善友好と競技力向上のため、翌41年から毎年交互に交流を実施することが確認された。

#### 昭和41年(1966)

協会創立30年の節目の年を迎え、前年日韓両国で協議した日韓親善大会が、韓国ソウル市において開催され、戦後国際交流の第1歩を踏みだした。

ベルリンで開催の世界選手権大会では、Fe級で三宅(兄)金、弟義行も銅メダルを獲得、兄弟で表彰台に上がった。また、タイ・バンコック市で開かれた第5回アジア大会では、Fe級で三宅(兄)が、M級で大内仁が金メ

ダルを獲得する活躍をみせた。

AWF総会で井口幸男が副会長に選任される。

#### 昭和42年(1967)

世界選手権大会が東京で開催される予定であったが、諸般の事情により大会を返上、IWFは物理的に代替地が得られず、'67世界選手権大会は中止を余儀なくされ、歴史上に汚点を残した。そのため、日本協会の信頼を失墜させた出来事でもあった。

#### 昭和43年(1968)

第19回オリンピック・メキシコ大会では、Fe級の三宅義信が優勝し、五輪2連覇を達成、弟義行も同じFe級に出場、銅メダルを獲得し、表彰台に上がった。M級出場の大内仁も銀メダルを獲得、日本が五輪初参加以来最高の成果をあげた大会でもある。

この年IWF総会において、西川正一(日本協会会長)が世界ウェイトリフティング連盟副会長に選任された。

#### 昭和44年(1969)

ポーランド・ワルシャワ市で開催された世界選手権大会は、三宅兄に代って出場した三宅義行がFe

級で優勝、そして大内仁がLH級で優勝した。世界選手権大会で同時に二階級制覇となったわけであるが、このことは、東京オリンピック前からの積極的な選手強化策の結果といえる。

国際交流では、ソ連チームが初来日、クレンツォフ(メキシコ五輪金メダル)ヤンタルツ(世界大会金メダル)等の外国人が秋田市で開催された全日本選手権大会に参加、3名の選手が優勝し、日本国際記録として留めている。

#### 昭和45年(1970)

5月の全国評議員会で協会法人化の決議がなされ、基本金募金活動に入る。アメリカ・コロンバスで開催の世界選手権大会でB級の安藤謙吉が銀メダル、Fe級の三宅義行が3位入賞を果たしたが、三宅はドーピングしたとして失格処分を受ける。しかし、1年後のIWF総会で、検査方法に問題があったとして処分は撤回され、名誉も回復された。第6回アジア大会はタイ・バンコックで開かれ、F級堀越武、Fe級三宅義行、M級八田信之、LH級大内仁の4選手が優勝し、4階級を制覇する。

また国際交流では、遠来のポーランド・チームを代々木体育館に迎え、日ボ親善大会を開催し、国際親善と競技力向上に寄与した。協会人事においては、理事長兼務

であった井口幸男副会長が副会長に、理事長に野中義治が就任し、協会法人化を目指し新スタートを切った。

#### 昭和46年(1971)

情報化時代の到来に伴い、本協会は会報第1号を発刊する。全日本学連は、東西学連の交流と競技力の向上を目的に、第1回全日本学生東西対抗競技会を開催する。ペルー・リマで開催の世界選手権大会で、Fe級出場の三宅義行が優勝、同級で安藤謙吉が2位とFe級を制し、東京オリンピック優勝の三宅(兄)以来、Fe級は日本のお家芸となった。

#### 昭和47年(1972)

IWFルール改正(階級追加)がメキシコ五輪時に行われ、F級(52kg)、スーパーヘビー級(110kg以上)を新設し、9階級となった第20回オリンピック大会がドイツ・ミュンヘンで開催された。Fe級の三宅義信は五輪三連覇を目指すが無敵に4位入賞に終わった。この大会では、東欧諸国を中心とする若手選手の台頭が著しく、記録も一段と飛躍した。我が国も選手交替期を迎えたが記録的に低調期となる。大会直前のIWF総会でルール改正が行われ、本大会を最後にP種目が廃止された。

#### 昭和48年(1973)

この年、沖縄復帰記念特別国体が沖縄県で開催され、ウェイトリフティング競技も実施された。

また、全日本社会人大会に職場対抗としての実業団大会が加わり、第1回大会を宮崎県で開催した。国際においては、キューバ・ハバナで開催の世界選手権大会へ、我が協会は若手選手を中心に6名の選手を派遣、B級で三木功司がS117.5kgの世界記録を樹立し3位銅メダルを獲得、外4名の選手も6位以内入賞を果たした。

#### 昭和49年(1974)

法人化を進めてきた協会は、文部省より11月21日付で社団法人の認可を受け、公益法人としてスタートすることとなった。第7回アジア大会はイラン・テヘランで開催され、8名の選手が出場、B級安藤謙吉、Fe級平井一正、LH級藤代末男、MH級大内仁が優勝、前回大会と同じ4階級を制覇した。大内は不十分なドーピング検査により禁止薬物が検出される。選手団本部はAGF実行委員会に強く抗議したが、最終決定はすっきりした結論でなく、今もって釈然としない。その後IWFは大内を1年間の出場停止処分としたのである。

#### 昭和50年(1975)

国体で昨年までブロック予選を実施していた高校の部が、第30回三重国体から少年男子となり、各都道府県より3名が出場できるようになった。ディスクの改良も行われ、ゴム巻ディスクからラバーディスクが誕生したのもこの年である。4月に来日したIWF事務総長により、前年国体で竹内雅朝(F級)、平井一正(Fe級)が世界記録に成功したあとの再検査は、これより3年前のルール改正で必要がなくなったことが明らかになった。体重超過のために公認申請をしなかった日本協会の失態が公に

なった。この年の世界選手権大会(モスクワ)で、竹内はF級でS108kgの世界記録を改めて更新した。国際事業では、日中友好大会が中国で、日韓親善大会が福岡県北九州市で開催された。世界においては、第1回ジュニア世界選手権大会がフランスで開催されるなど、我が協会にとっては国際化時代の幕あけとなった。

#### 昭和51年(1976)

4月19日の全日本選手権大会兼五輪予選会でオリンピック代表選手9人が理事会で決定した。しかしそのうち2人の人選に問題があるとして、全国総会は選手の人入れ替えを決議、理事会はこれに従った、しかし、このことに抗議して、すでに決定していた監督、コーチが辞任した。7月、モンリオールで開催された第21回オリンピック大会で、B級の安藤謙吉、Fe級平井一正が3位銅メダルを獲得した。ジュニア選手の強化育成を目指すジュニア世界選手権へ9名を派遣、B級で湯地保雄が初の銅メダルを獲得する。

#### 昭和52年(1977)

3月開催の通常総会において役員を選任が行われ、会長西川正一、副会長中野次男、佐藤育秀、赤坂俊夫、出野博、専務理事に林克也が就任した。法人化以来の累積赤字対策としての財務委員会、前年問題となった選手選考を踏まえた、新体制での競技力向上委員会の組織拡充に努めた。

国際舞台においては、西ドイツ・シュツットガルトで開催の世界選手権大会で56kg級の細谷治朗が金メダルに輝く。国内にあっては、ソ連チームを招聘し、日ソ友好大会を全日選手権大会と兼ねて岡山倉敷市で開催した。ルールでは、階級の呼称変更も行われ、kg級として52kg級から+110kg級の10階級が実施されたのもこの年であった。

### 国際交流時代の到来

#### 昭和53年(1978)

第20回オリンピック大会以降、若手選手の台頭が目覚しく、第21回モンリオール大会で、オリンピック史上最高の戦績をあげたソ連を筆頭に、ブルガリア、東独といった社会主義陣営諸国の躍進が目立った。選手強化が組織的に展開され、また、薬物使用の疑いが世界のウェイト界で問題視された時期でもある。こうした中で、各国の国際大会も多く、日本チーム招待の機会も増え、ソ連友好杯、国際ユース大会、パンノニア大会、トルコのペクル大会等へ選手を派遣、海外情報収集と選手の強化に努めた。この年、米国ゲティスバーグで開催の世界選手権大会では、60kg級の斎藤隆が銀、56kg級の安藤謙吉が銅メダルを獲得、続くタイ・バンコックでの第8回アジア大会で、67.5kg級の平井一正、82.5kg級佐藤薫、100kg級佐藤光正が金メダル獲得を果たした。検量時間のルール変更もこの年行われ、競技開始2時前から1時間となった。

#### 昭和54年(1979)

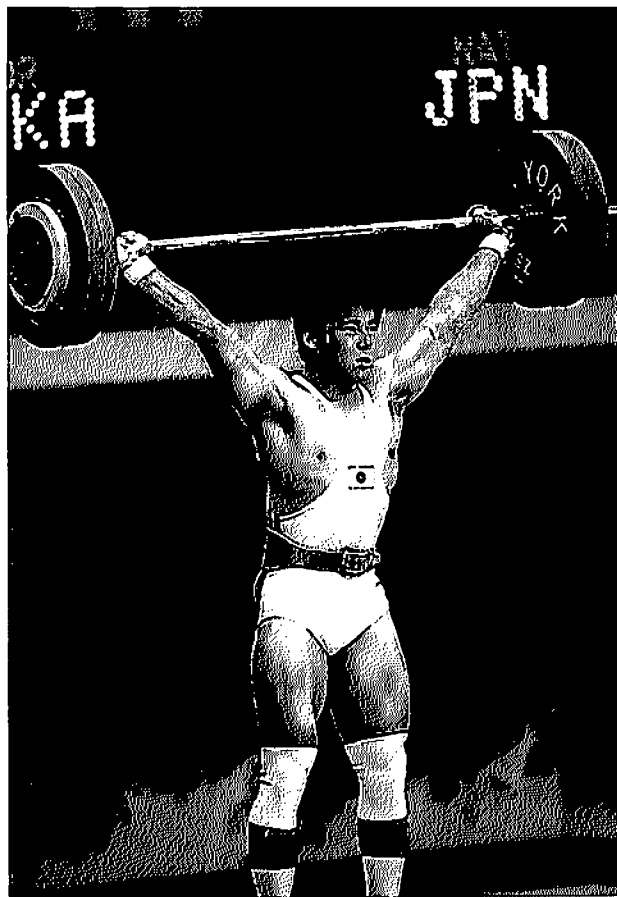


協会は、理事執行部の任期満了に伴い、通常総会において8代会長として小宮山英蔵・平和相互銀行会長を迎えることになった。しかし、協会が会長就任祝賀を計画  
中、突然逝去され、小宮山英蔵会長の実弟で衆議院議員  
の小宮山重四郎が兄英蔵氏の遺志を受け、第9代会長に  
就任したのが同年8月であった。

国際時代の到来と相まって、協会初のアジア選手権大  
会を8月15日から3日間、東京渋谷区の岸記念体育会館  
で、韓国、北朝鮮、インドネシア、イラン、イラク、タ  
イ、レバノン、パキスタン、シンガポールの計11ヶ国71  
名の各国代表選手を迎え、盛会裡に開かれた。また12月  
には、世界のスーパーヘビー級トップリフターを迎え、  
第1回世界スーパーヘビー級招待選手権大会を東京、後  
楽園ホールで開催した。ギリシャで開かれた世界選手権  
大会は世界記録ラッシュの中で終始した。日本選手もよ  
く健闘したが、60kg級の後藤節哉の3位銅メダルに留ま  
る。当協会は、恒久的オリンピック選手の強化育成を期  
し、若手ジュニアの国際交流として、日韓ユース交流の  
第1回大会を韓国で開催、全国高校総体優勝者を派遣し  
た。また、競技力向上委員会は、1年後に迫ったモスク  
ワ五輪の強化拠点に東京世田谷区の一軒家を借り、桜井  
勝利委員長を中心に長期キャンプを張る。

#### 昭和55年(1980)

第20回オリンピック大会日本代表候補は、4月のアジ  
ア選手権大会(韓国)、5月の日中友好大会(中国)へそれ  
ぞれ派遣、五輪強化を進めていたが、5月24日、オリ  
ンピック・ナショナルエントリー締切日、JOC臨時総会で  
不参加を決定。幻のオリンピック代表選手団となった。  
東京世田谷区で長期にわたる強化合宿をした代表選手  
は、解散を余儀なくされた。桜井委員長(五輪監督)は、  
日本代表選手団不参加の経緯と今後の対策について、選  
手の所属先、職場に出向き、その対応に奔走した。結果  
として、10月中国上海市で開かれた上海国際大会及び米



ロサンゼルスオリンピック82.5kg級3位の砂岡良治

国ホノルルでのアメリカンカップ国際大会へ五輪代替大  
会として選手を派遣したのである。国内においては、第  
1回全日本ジュニア選手権大会を山梨県で開催するに至  
り、ジュニア選手の育成に資することとなった。

#### 昭和56年(1981)

インドネシアで開催予定であった第13回アジア選手権  
大会が、国内事情により返上、アジア諸国の強い要請を  
受け、8月16日から19日まで愛知県体育館で開催した。  
国際競技力を目指す派遣事業では、イタリアで開かれた  
ジュニア世界選手権大会へ9選手を派遣、82.5kg級の砂  
岡良治外2選手が5位入賞に留まり、世界のジュニア選  
手の記録向上は一段と顕著となった。また、フランスで  
開催された世界選手権大会では、52kg級の真鍋和人がよ  
く健闘し、3位銅メダルを獲得した。

#### 昭和57年(1982)

全日本選手権大会(上尾市)で、90kg級砂岡良治がJで  
200kgを挙げ、我が国初の200キロリフターとなった。ブ  
ラジルで開かれたジュニア世界選手権大会で砂岡良治が  
82.5kg級で銀メダル、56kg級の原徹も銅メダルを獲得す  
る成長ぶりをみせた。インド・ニューデリーの第9回ア  
ジア大会に中国が初参加。日本は、52kg級真鍋和人、  
82.5kg級砂岡良治が優勝するが、メダル獲得数で中国に  
トップの座を譲る。競技会前に開催されたAWF(アジ  
アウエイトリフティング連盟)総会において、山本文雄  
協会理事が副会長に選任される。



昭和58年12月10日ワールドカップ・プログラム

## 昭和58年(1983)

日本がホスト国となって、AWF待望の第1回ジュニアアジア選手権大会を埼玉県スポーツ研修センターで開催。また、東京中央区立体育館に世界記録保持者ら14名を迎え、ワールドカップを開催したが、残念ながらわが国には参加有資格者がなく出場できなかった。国内競技会では、生涯スポーツの一環として、全日本マスターズ大会が、奈良県で開催の社会人大会と兼ねて第1会大会を実施する。また、ルールでテクニカルコントロール制度が導入された。国際競技力では、モスクワの世界選手権大会で60kg級村木洋介、82.5kg級の砂岡良治の4位入賞と、厳しい戦いとなる。続くジュニアは、ジュニア選手権大会で最高5位入賞に留まり、世界の戦力向上が一段と顕著になる。この年、五輪強化対策として、海外合宿をハンガリーで行う。

## 昭和59年(1984)

第23回オリンピック大会は、超大国米ソのオリンピック・ボイコットの応酬により、ロサンゼルスも片肺飛行となった。日本は、52kgの真鍋和人、56kg級小高正宏、82.5kg級砂岡良治が一歩力及ばず銅メダルで終った。初参加の中国は4階級を制し、王座に君臨した。国際イベントとして、国立代々木第二体育館において、国際フェアーを開催する。

## 昭和60年(1985)

高知県協会が加入し、47都道府県支部協会が加盟団体となる。競技の安全な普及と正しいテクニック修得のため、初心者における採点制競技会の導入を図った。IWFからは、新得のため、初心者における採点制競技会の導入を図った。IWFからは、新階級設置に関し、各国へ検討要請がされた。'88年に第24回オリンピック大会開催が決定した韓国のナショナルチームが来日、初の合同合宿を静岡県下田市において実施する。国際大会では、スウェーデンで開かれた世界選手権大会へ8名を派遣、82.5kg級砂岡良治の4位が最高で不振に終る。同年のジュニア世界選手権大会も60kg級小栗和成の4位入賞で世界との戦力格差が一段とひらく。

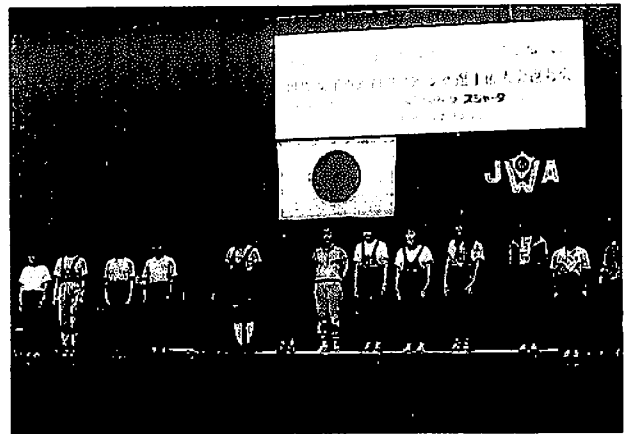
## 女子競技の普及

## 昭和61年(1986)

世界初の女子国際競技会として、第1回ウーマンズカップがハンガリーで開催された。わが協会も、全国指導講習会等で女子競技の普及、啓発を図る。第10回アジア大会は韓国ソウル市で開催、82.5kg級砂岡良治のアジア新記録での優勝による金メダル1つに終る。進況著しい韓国、中国に後れをとる。世界においては、世界選手権及びジュニア世界選手権大会ともに6位入賞を果たせず残敗。世界が一貫指導を組織的に進める強化に対し、わが国はじり貧となり、強化の抜本的見直し求められた。

## 昭和62年(1987)

アジア選手権大会が4月、埼玉県立スポーツセンター



昭和61年9月21日、第1回全国女子大会・選手紹介

で開催、52kg級Sで中国の何灼強が116.5kgの世界新をだす。この年、IWFは世界記録の認定基準変更を行い、IWFドーピングコミッション管理下のドーピングテストが義務づけられた。この時、女子の公開演技として長谷場久美、加藤令子の2人が初めて披露したのである。同年9月、神奈川県藤沢の日大で第1回全国大会を開催、続く11月の京都国体リハーサル大会に女子部を設け、女子競技の振興に資した。また、米国デイトナビーチで開かれた第1回女子世界選手権大会へ5名の選手を派遣した。競技力向上委員会が中心となって検討していた中学生対策も実現するに至り、埼玉県で第1回中学選手権大会開催の運びとなった。協会組織においては、理事任期満了に伴い、通常総会で小宮会長の留任、副会長に林克也、清藤六郎、仰木重利が就任した。

## 昭和63年(1988)

韓国ソウル市で開かれた第24回オリンピック大会参加のブルガリアチームの直前合宿を日本で実施したい旨の要請があり、埼玉県立スポーツ研修センターを会場として提供、公開練習を通し、多くの指導者が見学した。日本代表は、56kg級市場孝士、60kg級村木洋介の5位入賞に留まり、メダル獲得を逸した。日本でキャンプを張ったブルガリアは、2階級金メダルを獲得する活躍をするが、競技会半ばにしてドーピングの結果、禁止薬物となった利尿剤使用が発覚、以降の競技出場を断念、チームが帰国した。また、バンガルの選手がアナボリックステロイドホルモンで失格するという、ドーピングに揺れた大会となった。

ジャカルタで開かれた第2回女子世界大会は、第1回女子アジア選手権大会を兼ね、日本も7名の選手を派遣した。国内の国際大会は、世界のトップリフターを招待して、国立代々木第二体育館で、東京カップを開催する。二巡目国体の京都大会は、国体得点新方式によって実施される。協会創立50周年を迎え、11月22日記念式典を予定するが、昭和天皇崩御に伴い式典を自粛する。

## 平成元年(1989)

延期となった協会創立50周年記念式典を東京市ヶ谷会

館で挙行した。この年、日本体育協会内に位置づけのあった日本オリンピック委員会が、財団法人設立を認可され、林克也(JWA副会長)が理事に就任する。国際大会については、第2回東京カップを国立代々木第二体育館で開催。派遣事業では、第3回女子世界選手権大会(イギリス)へ派遣、52kg級に出場した植村ひろみが銀メダルを獲得、わが国初の女子メダリストとなる。世界をリードする東欧圏諸国との戦力格差をなくす強化策が急務とされた男子は、ブルガリアのヤンコルセフ(モスクワ五輪金メダル、世界記録32回樹立)をコーチとして招聘。12月末に来日し、翌年の全国指導者講習会で、ブルガリアの強化システム、練習プログラムが公開された。

#### 平成2年(1990)

第11回アジア大会が中国・北京市で開催され、女子競技が初参加となった。男子は、4階級で銅メダルを獲得したが、金ゼロに終わった。初参加の女子は、44kg級斉藤さと美と67.5kg級長谷場久美が銀メダルを獲得する戦果をあげた。中国の女子は、世界一の強さを発揮、世界記録の中で他を圧倒した。中国は続く世界選手権大会で世界記録を更新、世界の女王に君臨した。日本は、44kgの斉藤、52kg級の植村が銀メダルを獲得している。

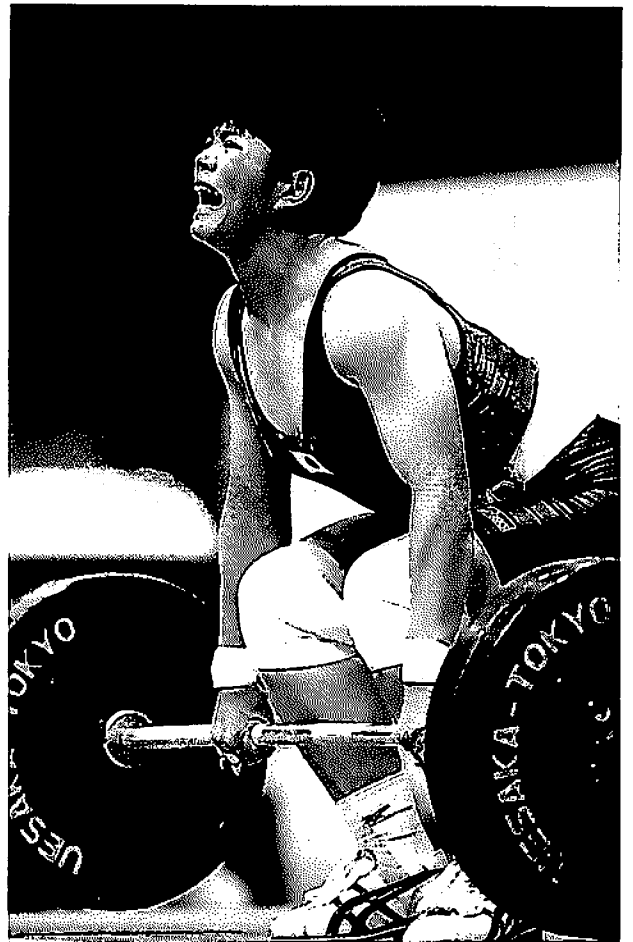
#### 平成3年(1991)

IWFは、明年に迫ったバルセロナ五輪の参加資格の変更を各国へ通達。1991年から1992年バルセロナ前までのIWF指定大会で参加基準記録及びドーピングテストをクリアした選手に参加資格権利を与えるとした。そのIWFの指定大会とは、世界大会、シニア及びジュニア、地域大会としてはアジア選手権大会である。この年の世界選手権及びジュニア選手権は、大会順位より資格獲得を優先して戦う結果となった。アジア選手権は、インドで開催予定であったが、国内の諸般の事情により返上、AWFの要請を受け、この年、茨城県神栖町で第23回アジア選手権を12月20日から4日間の日程で開催する運びとなった。続く24回大会は中国福建省で、IWFが指定した期限前の4月に開催、日本はこれらの大会で9階級23名の個人有資格を得た。

バルセロナ強化対策として、ヤンコルセフの再招聘を行い、長期にわたる合宿を展開する。女子の国際成績は、ドイツで開かれた世界選手権大会で、67.5kg級長谷場久美が銀メダルを獲得した。この年、日本オリンピック委員会では、林克也(JWA副会長)が専務理事に就任する。後任として本協会専務理事には、桜井勝利が就任した。

#### 平成4年(1992)

第25回オリンピック大会がスペインバルセロナで開かれ、IWFは、競技会前、参加選手全員を対象にドーピングコントロールによる異例の措置をとるアンチドーピングを徹底した。競技は崩壊したソ連がEUNの名称で参加、ブルガリア、東ドイツを吸収したドイツの3ヶ国で7つの金メダルを独占、日本は前回ソウル大会に続き



平成5.6.27、第11回インターナショナルフレンドシップ70kg級長谷場久美

メダルゼロ、56kg級佐久間勝彦の5位という不本意な成績で終わった。

11月、IWFは、スペイン領のカナリア諸島テネリフェで総会を開き、ルール改訂、階級変更を行った。階級の変更は、選手の体位の向上に伴い、体重区分を変更する旨の説明がされたが、その裏には、ドーピングによる世界記録、薬物使用による過去の記録にピリオドを打つために階級変更を断行したという背景があった。総会は採択の結果、男子は54kg、59kg、64kg、70kg、76kg、83kg、91kg、99kg、108kg、+108kgの10階級に決定、女子が46kg、50kg、54kg、59kg、64kg、70kg、83kg、+83kgの9階級となり、'93年1月から実施することとした。

日本と国際友好大会を進めてきた韓国、中国の大会の発展的解消を前提に11月中国蘇州で開かれた日中友好大会時、日中韓の代表者会議を開き、従来の男子に加え女子選手を含めた、3ヶ国インターナショナル・フレンドシップトーナメントという名称で、第1回大会を日本で開催することが合意、持ち回りで実施することが決まった。

協会組織にあつては、桜井専務理事が、所属先の協力を得て日本協会へ派遣され、諸事業の総括と2年後に迫った広島アジア大会のウエイトリフティング競技会の運営本部長として任についた。また、協会諸規程の整備を図った。選手強化を担当する競技力向上委員会は、この

年、選手強化委員会と改め、長期計画によるオリンピック選手強化対策を進める。この年、海外合宿で若手選手4名をブルガリアへ37日間派遣し、選手の強化に資す。

#### 平成5年(1993)

日本、韓国、中国の3ヶ国男女選手による第1回インターナショナル・フレンドシップトーナメントを群馬県水上町において開催した。

選手強化拠点として、モスクワ五輪時に実施した、通年強化策を埼玉県浦和市内の「いけ田旅館」に置き、桜井勝利強化本部長(兼務)、三木功司主任コーチを中心に拠点強化をスタートする。この年東アジア8ヶ国の第1回東アジア大会が中国・上海市で開かれ、ウエイトリフティング競技も実施され、日本代表を派遣した。また、新階級による世界選手権大会は、オーストラリア・メルボルンで男女競技が開かれ、男子59kg級の池畑大が、日本新記録で6位入賞を果たした。女子は70kg級長谷場久美が3年連続2位銀メダルを獲得する。

#### 平成6年(1993)

強化拠点の設置に伴い、再度ブルガリアのヤンコルセフコーチを招聘し、強化推進を図る。

第12回アジア大会は、10月2日から16日まで史上最高の参加国により、広島市で開かれた。ウエイトリフティング競技は、広島市佐伯区立スポーツセンターで行われ、今大会はソ連の崩壊によって中央アジア5ヶ国のうち、カザフスタン、ウズベキスタンの4ヶ国も参加した。この大会の競技会ステージは、床養生及びパーベル落下音の対策を配慮した発泡スチロールが使用された。競技成績は、世界記録の出るハイレベルのなか、男子は銀メダル1、銅メダル2、女子は銀メダル1、銅メダル1の成績に終り、中国を筆頭に、中央アジア勢、韓国のアジア戦力分布となる。この年、8期目の会長職にあった小宮山重四郎が、11月21日逝去された。残任期間、林克也副会長が会長代行として努める。国際関係では、シンガポールで開かれたAWF(アジアウエイトリフティング連盟)の総会で、桜井勝利がAWF副会長に選任された。

#### 平成7年(1995)

IWFは、1月1日付でアンチドーピング対策として、各国ナショナル選手の登録を義務づけた。この登録義務を怠った国は、その年の世界選手権大会、オリンピック大会に出場できないとした。また、第26回オリンピック大会アトランタ大会の参加資格方法が変更された。五輪前年の世界選手権大会が国別対抗(エントリー10名)得点成績によって資格権利を与え、世界選手権で資格を獲得できなかった国は、地域大会(アジア選手権大会)で、アジアの場合5名の出場資格を与えるというオリンピック予選方法となった。選手強化委員会は、11

月の世界選手権大会に向け、長期合宿と各国戦力の情報分析を進め、世界選手権大会に臨んだ。大会は中国広州で開かれ、史上最高の参加国のなか熱戦が展開され、各国10名の選手の成功率が資格権利の明暗を分けた。日本は全員の健闘により、目標とした7名の資格を得た。

国際競技会では第1回女子ジュニア世界選手権大会(ポーランド・ワルシャワ)、第1回女子ジュニアアジア選手権大会(中国・江蘇省)が始まり、それぞれ派遣参加する。

この年、3月の通常総会において、空席となっていた会長に林克也副会長が選任され、第10代会長に就任した。また、'96アジア選手権大会が、五輪地区予選会を兼ね、カザフスタンで開催予定であったが、開催不可能により、AWFは日本開催を要請、理事会は日本開催を承認し、この年の9月大会準備に入った。

#### 平成8年(1996)

年度当初の4月4日から9日まで、千葉県八千代市の協力を得て、第28回シニア、第9回女子アジア選手権大会をアトランタ五輪地域予選として開催、男女世界記録のなか盛會裡に終り、北朝鮮2名、イラン、タイ、インドネシア各1名の合計5名がアトランタ五輪出場資格を得た。この大会のドーピング検査は、IWF指定のドイツのケルンにある機関で実施することになり、検体を東京国際空港から空輸で対応する。

第26回オリンピック大会は、7月アトランタ・ジョージアワールド会議センターで開かれ、世界予選を通過した240名のリフターによって熱戦が展開。日本は納富俊行が54kg級日本新で健闘するが10位、続く59kg級池畑大も日本新記録更新ながらメダルに一步及ばず4位に終った。各階級とも世界記録ラッシュで終始した。

IWFは、12月ギリシャのアテネで総会を開き、ルール改正では、ジュニア女子の年令を男子と同じ20歳としたほか、オリンピックの参加年令を16歳に引きあげ、禁止薬物使用者に対する罰則の一部変更を行い、明1997年1月1日付で施行することとなった。

また、IWFは、11月のIOC理事会において、2000年のシドニー大会で女子競技が承認された旨報告された。これを受けて、IWFは、男女機会均等を踏まえ、今後、ワーキンググループ(検討委員会)と特別コミッションによって検討を重ね、IOCと調整の上、1997年5月アフリカのケープタウンで開催のIWF総会で結論をだすこととした。日本の桜井勝利もこのワーキングメンバーに任命された。1993年に階級変更されて間もないが、女子五輪参加に向けて、階級変更、特に体重区分の変更、現行、男子10階級、女子9階級の数が下回ることが予想される。

(社)日本ウエイトリフティング協会60年史年表

年次	協会事項	参考事項
1932年 (昭和7)	第2回全朝鮮力道大会に飯田徳蔵、若木竹丸、飯田一郎が招待される。(12月)	第10回オリンピック競技大会(ロサンゼルス)、日本選手団192名参加、金メダル7個。(7月30日～8月14日) 第3回オリンピック冬季競技大会(レークプラシッド)、日本選手団22名参加、入賞ゼロ。(12月4日～13日)
1933年 (昭和8)	嘉納治五郎IOC委員、ウィーンでのIOC会議の帰途、オーストリアでバーベルを購入。(8月)	早大戸塚球場に初の夜間照明成る。(7月) 明治神宮外苑相撲場にはじめて組立式バスケットボールのコートできる。(1月)
1934年 (昭和9)	オーストリアで購入した国際標準バーベル、東京代々木の文部省体育研究所に搬入。(3月) 研究所の安東熊夫、競技の副賞たる。	第10回極東選手権競技大会マニラで開催、会期中極東体育協会解消、東洋体育協会が結成。(5月)
1936年 (昭和11)	第1回東京市民選手権大会、わが国初の競技会を東京YMCAで開催。(5月2日) 第1回全日本選手権大会が全日本体操連盟の下に開催、韓国の金容星、金晟集選手参加。この日日本重量学連盟結成。(5月31日)	第4回オリンピック冬季大会(ガルミッシュ・バルテンキルヘン)日本選手団48名参加、メダルゼロ。(2月6日～16日) 第11回オリンピック競技大会(ベルリン)日本選手団249名参加、金メダル6個。(8月1日～16日)
1937年 (昭和12)	第1回関東重畳大会を東京・神田一ツ橋の国民体育館で開催。(7月19日) 第2回全日本選手権大会を国民体育館で、全日本体操連盟共催で開催。(11月2日) 競技規則及び解説書刊行。(11月1日) 日本重量学連盟発会式を東京・京橋の中央亭で挙行、三島通陽初代会長就任。(9月29日)	神田一ツ橋の国民体育館閉館(5月31日) 後楽園球場開場(9月11日) 近代オリンピックの祖ピエール・ド・クーベルタン死去、75歳。(9月2日)
1938年 (昭和13)	国際重量学連盟会長宛に加盟申請。(2月2日) 大日本体育協会加盟。(6月20日) 第3回全日本選手権大会を国民体育館で開催、朝鮮の南寿逸、フェザー級プレス、スナッチで世界新記録樹立。(12月17日)	IOC委員嘉納治五郎、カイロのIOC総会の出席の帰途、水川丸船中で死去、78歳。(5月3日) 第12回オリンピック東京大会(1940年)の返上を閣議で決定。(7月15日)
1939年 (昭和14)	第1回種目別競技会を東京・国民体育館で開催。(4月15日) 依差持久及び回数競技規定、さし挙回数競技規定を制定。(3月28日) 第4回全日本選手権大会でフェザー級南寿逸、3種目に世界新記録。(12月2日)	ウィーンで開催の国際学生大会参加の日本選手、国際状況悪化のため大会2日目で帰国(8月) 野球発祥の地といわれるクーパースタウンで100年祭挙行、野球博物館閉館。(6月12日)
1940年 (昭和15)	第5回全日本選手権大会、依差持久競技等と併せ開催(5月28日～30日)	第12回オリンピック競技大会(東京返上後ヘルシンキ)中止。
1941年 (昭和16)	日本重量学連盟解散。(6月)	岸記念体育会館がお茶の水に落成(3月22日) 明治神宮大会を除き7月13日以降の全国大会中止。
1942年 (昭和17)		大日本体育協会、大日本体育会として発足。(4月8日) 厚生省、明治神宮国民体育大会を明治神宮国民練成大会と改称。(10月29日)
1943年 (昭和18)		東京6大学野球連盟解散。(4月) 学徒体育大会一切禁止。(9月) 戦争のため競馬の開催中止。(12月7日)
1944年 (昭和19)		日本体育会は各競技大会の優勝杯献納を決定。(11月)
1945年 (昭和20)		第二次世界大戦終結。(8月15日) 大日本体育会の部会として吸収された競技団体の多くも新組織で再出発。 大日本体育会も再び加盟団体組織に改組。
1946年 (昭和21)	日本ウエイトリフティング協会と改称し、再結成。(3月) 第1回国民体育大会に兼ねて第6回全日本選手権大会(京都府)を開催。(11月1日～11月3日)	日本国憲法公布。(11月3日) 第1回国民体育大会秋季大会、京都、大阪、兵庫、滋賀で開催。(11月1日～3日)
1947年 (昭和22)	第2回国民体育大会に兼ねて第7回全日本選手権大会(石川県)を開催。(10月30日～11月3日)	教育基本法、学校教育法公布。(3月) 第2回国民体育大会秋季大会、石川県で開催。団体マーク制定。(10月30日～11月3日)
1948年 (昭和23)	憲法公布記念大会が明治神宮で開催、重量学参加演技す。 第3回国民体育大会に兼ねて第8回全日本選手権大会(福岡県)を開催。(10月29日～11月3日)	大日本体育会、日本体育協会に改称。(11月3日) 第14回オリンピック大会(ロンドン)、第5回オリンピック冬季大会(サンモリッツ)に日本招待されず。

年次	協会事項	参考事項
1949年 (昭和24)	第2代会長、小西英雄就任。(4月) 第4回国民体育大会に兼せて第9回全日本選手権大会(東京都)を開催。	第4回国民体育大会夏季、秋季大会(東京都)開催、両殿下初の団体お成り。
1950年 (昭和25)	国際ウエイトリフティング連盟に加盟承認。(10月13日)	この年大部分の競技団体、国際連盟に復帰。
1951年 (昭和26)	第1回アジア競技大会(ニューデリー)に選手2名参加、フェザー級井口幸男、ライト級窪田登3位入賞。(3月4日～11日) 日本初の国際招待大会(ハワイチーム)、日米親善大会を東京で開催。(10月11日)	第1回アジア競技大会(ニューデリー)に5競技、日本選手団65名参加、金メダル24個。(3月4日～11日) IOC総会(ウイーン)で日本のオリンピック大会参加(1952年、オスロ及びヘルシンキ)を正式決定。(5月7日)
1952年 (昭和27)	第15回オリンピック競技大会(ヘルシンキ)にバンタム級白石勇出場。(7月19日～8月3日) 第2回日米親善大会(ハワイ)へ選手5名が遠征。	第15回オリンピック競技大会(ヘルシンキ)に日本選手団103名参加、金メダル1個。(7月19日～8月3日)
1953年 (昭和28)	国民体育大会に兼んでいた全日本選手権大会が分離独立し、愛媛県で開催。	スポーツの宮様秩父宮殿下御逝去。(1月4日) スポーツマン綱領を制定。(10月21日)
1954年 (昭和29)	第2回アジア競技大会(マニラ)に選手5名参加。(5月1日～9日) 第9回国民体育大会(北海道)ブロック制参加となる。(8月22～26日) 第1回全国高校大会が全日本選手権の中で徳島県で開催。(10月17日～21日) 全日本学生連盟結成。	第2回アジア競技大会(マニラ)の日本選手団198名参加、金メダル38個。(5月1日～9日) わが国初の世界選手権大会(男子スピードスケート)、札幌で開催。(1月16日)
1955年 (昭和30)	公認審判員制度開始。(4月) 第3代会長、大谷米太郎就任(4月) 第1回全日本学生選手権大会を東京で開催。	東京都議会、第18回オリンピック東京大会招致案を可決。(10月10日)
1956年 (昭和31)	第4代会長、加藤高藏就任。(4月) 第16回オリンピック競技大会(メルボルン)に選手5名参加、ライト級大沼賢治4位、フェザー級白鳥博義5位、バンタム級南部良雄6位入賞。(11月22日～12月8日)	第16回オリンピック競技大会(メルボルン)に日本選手団162名参加、金メダル4個。(11月22日～12月8日) 日本ラグビーフットボール協会、日体協脱退。(6月18日)
1957年 (昭和32)	日本チーム、中国(北京市外)に遠征、日中友好大会参加。(6月29日～7月24日) 世界選手権大会(テヘラン)に日本初参加。(11月8日～12日) 第5代会長、川名勇就任。	ボストンマラソンのコースが正規より1.085m短いことが発覚、前年度のコースレコードが取消。(4月) 第12回静岡岡岡体で初めて炬火リレーが行われ、開催県初の天皇杯獲得。(10月)
1958年 (昭和33)	第3回アジア競技大会(東京)に選手8名参加、バンタム級木暮茂夫金メダル獲得。(5月24日～6月1日) 第6代会長、矢下治蔵就任。(9月)	第3回アジア競技大会(東京)に日本選手団337名参加、金メダル67個。(5月24日～6月1日) 中華全国体育会(中国NOC)がIOC脱退。(8月)
1959年 (昭和34)	全国高体連にウエイトリフティング部会が加盟。(4月1日) 第14回国民体育大会(東京)、バンタム級スナッチで三宅義信、ライト級ジャークで山崎弘、日本初の世界新記録を樹立。 第7代会長、西川正一就任。(12月)	IOC総会(ミュンヘン)で1964年の第18回オリンピック大会開催地、東京と決定。(5月25日) 団体の開催県が都道府県持ち回りとなる。
1960年 (昭和35)	第17回オリンピック競技大会(ローマ)に選手7名参加、バンタム級三宅義信、初の銀メダル。(8月25日～9月11日) 京極高規協会副会長、IWF副会長に就任。(8月) 第15回国民体育大会(熊本)に高校の部新設。(10月23日～27日)	第17回オリンピック競技大会(ローマ)に日本選手団219名参加、金メダル4個。(8月25日～9月11日)
1961年 (昭和36)	世界選手権大会(ウイーン)に選手7名参加、バンタム級三宅義信3位銅メダル。(9月20日～25日)	スポーツ振興法、法律第141号として公布。(6月16日)
1962年 (昭和37)	第4回アジア競技大会(ジャカルタ)に選手7名参加するが招待問題でウエイトリフティング競技中止となる。(8月) 世界選手権大会(ブタペスト)に選手7名参加、バンタム級三宅義信初の優勝。(9月16日～22日)	第4回アジア競技大会(ジャカルタ)に日本選手団250名参加、金メダル74個。 招待問題で粉料(イスラエル、台湾選手の入団拒否)。(8月24日～9月4日)
1963年 (昭和38)	世界選手権大会(ストックホルム)に選手7名参加、フェザー級三宅義信優勝。(9月7日～13日) 東京国際スポーツ大会兼全日本選手権大会(東京)開催。(10月11日～16日) 第1回全日本社会人選手権大会(東京)開催。	世界35ヶ国から600名の世界一流選手が参加し、東京国際スポーツ大会開催。(10月11日～16日) IOC、インドネシアのオリンピック大会への出場停止を決議。(2月)
1964年 (昭和39)	第18回オリンピック競技大会(東京)に選手7名参加、フェザー級三宅義信優勝、バンタム級ノ関史郎、ミドル級大内仁:3位、外全員入賞果たす。(10月10日～24日)	第18回オリンピック競技大会(東京)に日本選手団437名参加、史上最高の金メダル16個。(10月10日～24日) 岸記念体育会館落成。(7月10日)
1965年 (昭和40)	世界選手権大会(テヘラン)に選手6名参加、フェザー級三宅義信優勝。(10月27日～11月3日)	IOC総会(マドリード)で東ドイツの正式加盟が承認、従来オリンピックに統一チームで参加していた東ドイツが1968年五輪から別々に参加となる。(10月)

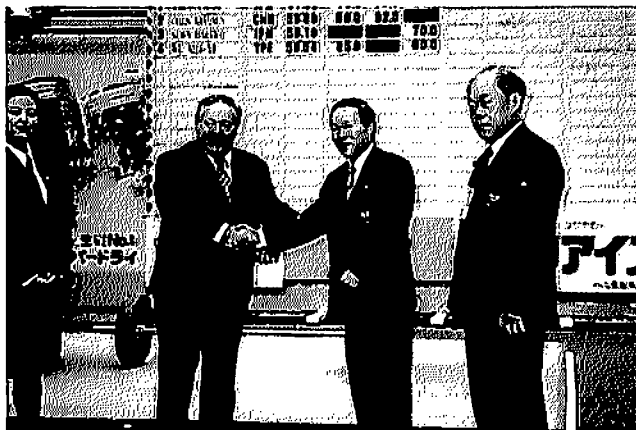
年次	協会事項	参考事項
1966年 (昭和41)	世界選手権大会(東ベルリン)に選手6名参加、フェザー級で三宅義信4連勝。(10月15日～27日) 第5回アジア競技大会(バンコク)に選手7名参加、金メダル2個獲得。(12月9日～20日) 井口幸男協会副会長、AWF副会長に就任。(12月) 第1回日韓親善大会始まる。(韓国)	IOC総会(ローマ)で第11回オリンピック冬季大会の開催地に札幌決定。(4月26日) 第5回アジア競技大会(バンコク)に日本選手団259名参加、金メダル78個。(12月9日～20日) 第21回大分国体、大会会長トロフィーが制定された。(10月)
1967年 (昭和42)	世界選手権大会東京開催を返上したため、代替地が無く中止となる。	第10回ユニバーシアード夏期大会(東京)、共産圏不参加で34ヶ国に減少。(8月27日～9月4日)
1968年 (昭和43)	第19回オリンピック競技大会(メキシコ)に選手7名参加、フェザー級三宅義信優勝、三宅義行3位、兄弟で表彰台に上がる。ミドル級大内仁2位、日本金、銀、銅メダル獲得。(10月12日～27日) 西川正一協会長、IWF副会長に就任。(10月)	第19回オリンピック競技大会(メキシコ)に日本選手団215名参加、金メダル11個。(10月12日～27日) 第10回オリンピック冬季大会(グルノーブル)に日本選手団78名参加、戦後はじめて入賞者なしに終わる。(2月6日～18日)
1969年 (昭和44)	全日本選手権大会(秋田県)にソ連チーム参加、3階級で優勝。(7月4日～6日) 世界選手権大会(ワルシャワ)に選手7名参加、フェザー級三宅義行、ライトヘビー級大内仁優勝、日本2階級を制す。(9月20日～28日)	IOCは北朝鮮の国名呼称をDPRK(朝鮮民主主義人民共和国)とすることを承認。 学校教育活動外の運動競技の基準決まる。(6月)
1970年 (昭和45)	日本ポーランド友好大会を東京で開催。(4月16日) 協会法人化の基本金募金活動が始まる。(5月) 世界選手権大会(コロンバス)に選手9名参加、バンタム級安藤謙吉2位、フェザー級三宅義行3位。三宅はドーピングで失格処分となる。(9月12日～20日) 第6回アジア競技大会(バンコク)に選手7名参加、金メダル4個獲得。(12月9日～20日)	日本体育協会、日本クレア射撃協会を退会処分に付す。(11月) 第6回アジア競技大会(バンコク)に日本選手団267名参加、金メダル74個。(12月9日～20日)
1971年 (昭和46)	世界選手権大会(リマ)に選手9名参加、フェザー級で三宅義行優勝、安藤謙吉2位の金、銀メダル獲得。(9月18日～26日) IWF総会(リマ)で、三宅義行、前年のドーピングは処分撤回、名誉回復となる(9月) 第1回全日本学生東西対抗戦始まる。(11月) 協会機関誌、会報第1号創刊。(12月)	札幌国際スポーツ大会(アレス五輪)開催。(2月7日～14日) 全国中学生スポーツ大会開会(15種目)。(8月)
1972年 (昭和47)	第20回オリンピック競技大会(ミュンヘン)に選手9名参加、日本4位に留まりメダルを逃す。(8月26日～9月11日) フライ級とスーパーヘビー級が新設され、9階級となる。 IWF総会(ミュンヘン)で、ミュンヘン大会を最後として、プレス競技の廃止決定。(8月)	第20回オリンピック競技大会に日本選手団219名参加、金メダル13個。(8月26日～9月11日) 第11回オリンピック冬季大会(札幌)に日本選手団110名参加、70メートル級ジャンプで日本、金、銀、銅メダルの獲得。(2月3日～13日)
1973年 (昭和48)	復讐記念沖縄特別国体参加。(5月3日～6日) 世界選手権大会(ハバナ)に選手6名参加。バンタム級三木功司、スナッチで世界新記録樹立し3位入賞。(9月16日) 第1回全日本実業団選手権大会、宮崎県で始まる。(11月23日～25日)	国民体育大会開催要項(昭和50年度実施)の改正。 アジア競技連盟の評議員会(テヘラン)で、中国の加盟が承認される。(11月)
1974年 (昭和49)	第7回アジア競技大会(テヘラン)に選手8名参加、金メダル4個獲得。(9月1日～15日) ミドルヘビー級優勝の大内仁、ドーピングで失格の宣告される。世界選手権大会(マニラ)に選手8名参加、フライ級堀越武スナッチ世界新で3位、バンタム級細谷治朗3位。(9月21日～29日) 日本ウエイトリフティング協会、社団法人設立認可(文部省)。(11月21日)	第7回アジア競技大会(テヘラン)に選手団326名参加、金メダル69個。(9月1日～15日) 大内仁、ドーピングで失格を宣告されたが、JOC失格と認めず、中国、アジア競技大会に参加。
1975年 (昭和50)	第1回日中友好大会(中国)始まる。(6月6日～12日) 第1回ジュニア世界選手権大会(マルセイユ)始まる。選手8名参加。(7月8日～12日) 世界選手権大会(モスクワ)に選手9名参加、フライ級竹内雅朝スナッチ世界新記録。(9月16日～23日) 第30回国民体育大会(三重県)で少年男子新設、各都道府県3名(少年)が出場できることとなる。(10月)	日本女子登山隊がエベレスト(8,848メートル)登頂、女性初の征服。(5月16日) サンフランシスコ-沖繩、一人乗り太平洋横断ヨットレースに参加した小林則子が完全帆走、女性単独無寄港の最長記録をつくる。(11月)
1976年 (昭和51)	オリンピック日本代表選考で全国総会代表選手の入替え決議。(5月) ジュニア世界選手権大会(グダニスク)に選手9名参加、バンタム級湯地保雄3位、初のメダル獲得。(6月6日～13日) 第21回オリンピック競技大会(モントリオール)に選手9名参加、バンタム級安藤謙吉、フェザー級平井一正3位銅メダル。(7月19日～8月3日)	第21回オリンピック競技大会(モントリオール)に日本選手団268名参加、金メダル9個。(7月19日～8月3日) 第12回オリンピック冬季大会(インスブルック)に参加のスケート、スキーともに入賞なし。(2月4日～15日)

年次	協会事項	参考事項
1977年 (昭和52)	日ソ友好大会を全日本選手権大会(岡山)と兼ねて開催。(6月11日～12日) 世界選手権大会(ジュットガルド)に選手6名参加、56kg級細谷伯朗優勝。(9月17日～25日) IWF階級呼称変更でキログラム制とし、52kg級から+110kg級の10階級を実施。(1月)	オリンピックデー記念式典でオリンピック入賞者(6位以内)451名に、バッジ、記念標授与。(6月23日)  札幌市、IOC理事会でキランニ会長に第14回冬季大会の招請状渡す。(10月20日)
1978年 (昭和53)	世界選手権大会(ゲアイスバーク)に選手10名参加、60kg級森森隆2位、56kg級安藤謙吉3位。(10月4日～8日) 第8回アジア競技大会(バンコック)に選手10名参加、金メダル3個獲得。(12月9日～20日)	第14回オリンピック冬季大会は、サラエボに決定、札幌招致ならず。(6月18日) 第8回アジア競技大会(バンコック)に日本選手団373名参加、金メダル70個(12月9日～20日) 第8回アジア大会は、IOCの公認のないまま、イスラエル抜きで開催。
1979年 (昭和54)	第8代会長、小宮山英歳就任。(5月) 第9代会長、小宮山重四郎就任。(8月) 第11回アジア選手権大会、東京で開催。(8月15日～17日) 第1回日韓高校親善大会始まる(韓国)。(9月2日) 世界選手権大会(サロニキ)に選手10名参加、60kg級後藤藤哉3位。(11月3日～12日) 第1回スーパーヘビー級招待大会を東京で開催。(12月1日)	IOC理事会(名古屋)、1958年脱退から21年ぶりに中国のIOC加盟を承認、台湾は「チャイニーズタイペイオリンピック委員会」としてIOCに残す。(10月23日～25日)
1980年 (昭和55)	第22回オリンピック競技大会(モスクワ)に選手10名を決定するが、日本不参加となる。(5月) 五輪代表をアメリカンカップ(ホノルル)及び上海国際大会へ代替大会として派遣。(10月) 第1回全日本ジュニア選手権大会(山梨県)始まる。(4月2日～3日)	第22回オリンピック大会(モスクワ)、ナショナルエントリー締切日、JOC臨時総会で不参加決定。(5月24日) JOC常任委員会、日本選手団全面不参加確定、翌のオリンピック選手団承認。(6月11日)
1981年 (昭和56)	第13回アジア選手権大会を名古屋で開催。(8月16日～19日) 世界選手権大会(リール)に選手4名参加、52kg級貞鍋和人3位入賞。(9月11日～20日)	IOC総会(バーテンバーテン)で1988年オリンピック大会開催地韓国ソウル市決定、名古屋は敗れる。(9月30日) 競技会の呼称に協賛するスポンサーの企業名を付す「冠大会」を日体協アマチュア委員会承認する。(9月)
1982年 (昭和57)	全日本選手権大会(埼玉県)で、90kg級砂岡良治、日本初のジャーク200kgリフターとなる。(7月9日～11日) ジュニア世界選手権大会(サンパウロ)に選手10名参加、82.5kg級砂岡良治2位、56kg級原徹3位でメダル獲得。(8月9日～15日) 第9回アジア競技大会(ニューテリー)に選手10名参加、金メダル2個獲得。(11月19日～12月4日) 山本文雄協会理事、AWF副会長に就任。(11月)	第8回アジア競技大会(ニューテリー)に日本選手団463名参加、金メダル57個。金61個の中国にはじめて王座を奪われる。(11月19日～12月4日) AGFを改組、OCAとなる。会長にシェイク・ファハド(クエート)就任。(12月) 日本体育協会公認スポーツドクター制度発足。
1983年 (昭和58)	第1回アジアジュニア選手権大会を埼玉県で開催。(10月26日～28日) 第1回全日本マスターズ大会(奈良県)始まる。(11月11日～13日) IWFワールドカップを東京で開催。(12月10日)	第17回ユニバーシアード夏季大会(エドモントン)参加、金メダル2個。(7月1日～11日) 第1回ユニバーシアード冬季大会(ソフィア)参加、金メダル1個。(2月18日～27日)
1984年 (昭和59)	国際スポーツフェア-招待競技会東京で開催。(5月6日) 第23回オリンピック競技大会(ロサンゼルス)に選手9名参加、52kg級貞鍋和人、56kg級小高正宏、82.5kg級砂岡良治、3位銅メダル獲得。(7月28日～8月12日)	第23回オリンピック競技大会(ロサンゼルス)に日本選手団308名参加、金メダル10個。ソヴィエト等不参加。(7月28日～8月12日) 第14回オリンピック冬季大会(サラエボ)に日本選手団69名参加、銀メダル1。(2月8日～19日)
1985年 (昭和60)	初心者を対象に採点制競技を制度化する。(4月) 韓国のソウル五輪候補が来日、初の日韓合同を下田市で開催。(7月) 世界選手権大会(ソグテリエ)に選手8名参加、82.5kg級砂岡良治の4位に終わる。(8月23日～31日)	日本2度目のユニバーシアード夏季大会を神戸市で開催、金メダル6個獲得。(8月24日～9月4日)
1986年 (昭和61)	全国高等学校選抜大会、第1回大会が神奈川県で始まる。(3月27日～28日) 第10回アジア競技大会(ソウル)に選手10名参加、金メダル1個に終わる。(9月20日～10月5日)	第1回アジア冬季競技大会(札幌市)に日本選手団119名参加、金メダル29個。(3月1日～8日) 第10回アジア競技大会(ソウル)に日本選手団551名参加、金メダル58個で中国、韓国の後塵を拝す。(9月2日～10月5日)
1987年 (昭和62)	第19回アジア選手権大会を埼玉県で開催。(4月17日～19日) 第1回全国中学大会(埼玉県)始まる。(8月16日) 第1回全国女子大会(神奈川県)始まる。(9月21日) 第1回世界女子選手権大会(テイトナビーチ)始まる、選手4名参加。(10月30日～11月1日)	36年ぶり開催の(財)広島アジア競技大会組織委員会設立。(4月1日) 第19回ユニバーシアード夏季大会(ザクレブ)参加、金メダル3個。(7月8日～19日)



年次	協会事項	参考事項
1988年 (昭和63)	<p>第1回東京カップ、世界トップリフター招待による大会を東京で開催。(4月4日)</p> <p>ソウル五輪参加のブルガリア代表、直前合宿を埼玉県で行う。(9月)</p> <p>第24回オリンピック競技大会(ソウル)に選手10名参加、56kg級、60kg級5位入賞に終わる。(9月17日～10月2日)</p> <p>第2回世界女子選手権大会(ジャカルタ)開催、兼ねて第1回アジア女子選手権大会始まる。選手7名参加、52kg、56kg級で5位入賞。(12月2日～4日)</p>	<p>第24回オリンピック競技大会(ソウル)に日本選手団337名参加、金メダル4個。(9月17日～10月2日)</p> <p>第15回オリンピック冬季大会(カルガリー)に日本選手団81名参加、銅メダル1個。(2月13日～28日)</p> <p>第43回国民体育大会(京都)より新得点方式で実施。(10月)</p>
1989年 (平成元年)	<p>協会創立50周年記念式を東京で開催。(2月17日)</p> <p>第2回東京カップを東京で開催。(5月4日)</p> <p>第3回世界女子選手権大会(マンチェスター)に選手8名参加、52kg級植村ひろみ日本初の銀メダル獲得。(11月24日～26日)</p> <p>ブルガリア、ナショナルコーチ、ヤンコルセフ(五輪金メダル)を招聘する。(12月～平成2年3月)</p>	<p>日本オリンピック委員会の財団法人設立認可(文部大臣)。(8月7日)</p> <p>FISU実行委員会(パルマ)で、1995年ユニバーシアード夏季大会開催地に福岡市を決定。(12月3日)</p>
1990年 (平成2)	<p>世界女子選手権大会兼世界ジュニア選手権大会(サラエボ)に選手、女子6名、男子7名参加。</p> <p>44kg級齋藤さと美、52kg級植村ひろみ、銀メダル獲得、ジュニアは、52kg級池畑大、56kg級佐久間勝彦6位。(5月26日～6月3日)</p> <p>第11回アジア競技大会(北京)、女子競技新設、男子10名、女子9名参加、男子銅メダル4個に終わる。女子44kg齋藤さと美、67.5kg長谷場久美が2位銀メダル、56kg阿部真美3位入賞。</p> <p>ヤンコルセフ、アジア大会コーチとして参加。(9月22日～10月7日)</p>	<p>第2回アジア冬季競技大会(札幌)に日本選手団103名参加、金メダル18個。(3月9日～14日)</p> <p>イラク軍クエートへ侵攻し、OCA会長シェイク・ファハド逝去。(8月2日)</p> <p>第11回アジア競技大会(北京)に日本選手団674名参加、金メダル38個。(9月22日～10月7日)</p> <p>第18回オリンピック冬季競技大会、1998年の開催都市として長野が立候補届提出。(IOC本部)</p>
1991年 (平成3)	<p>IWF、バルセロナ・オリンピック出場資格権獲得方法をIWF指定大会(世界シニア、ジュニア大会)各地域大陸大会に限定する旨各NFに通達する。(1月)</p> <p>世界ジュニア選手権大会(マグデブルグ)に選手9名参加、56kg河井健二3位銅メダル獲得。(5月7日～12日)</p> <p>世界選手権大会兼世界女子選手権大会(ドナウエソンゲン)、男子10名、女子6名参加。</p> <p>男子はオリンピック資格獲得者9名、女子67.5kg級長谷場久美2位、52kg級植村ひろみ3位入賞。(9月27日～10月5日)</p> <p>第23回アジア選手権大会兼オリンピック出場資格権大会として茨城県で開催。(12月20日～23日)</p> <p>林克也協会副会長JOC専務理事に就任。(3月)</p>	<p>第15回ユニバーシアード冬季大会(札幌)に日本選手団118名参加、金メダル14個。(3月2日～10日)</p> <p>JOCが特定公益増進法人として認可さる。(4月1日)</p> <p>IOC総会(バーミンガム)で第18回オリンピック冬季競技大会、1998年開催都市に長野が決定。(6月15日)</p>
1992年 (平成4)	<p>ジュニアを中心とする若手選手をブルガリアへ派遣、海外遠征合宿を実施。(2月～3月)</p> <p>第25回オリンピック競技大会(バルセロナ)に選手10名参加、56kg級佐久間勝彦の5位入賞に留まる。(7月25日～8月9日)</p> <p>IWF総会(スペイン)で、旧階級が廃止、男女新階級が決定、新階級の実施は1993年1月1日付とする。(11月15日)</p> <p>IWFオリンピック出場全選手対象にドーピング検査を実施す。(7月)</p>	<p>第16回オリンピック冬季大会(アルペールビル)に日本選手団105名参加、金メダル1個。(2月8日～23日)</p> <p>第25回オリンピック競技大会(バルセロナ)に日本選手団377名参加、金メダル3個。(7月25日～8月9日)</p> <p>JOCスポーツ賞制定。(1月)</p>
1993年 (平成5)	<p>選手強化拠点として浦和市内「いけ田旅館」に置き、選手強化をスタートす。(3月)</p> <p>第1回東アジア競技大会(上海)開催、選手10名参加。(5月10日～14日)</p> <p>第1回日本、韓国、中国3ヶ国フレンドシップトーナメント(群馬県水上町)始まる。(6月26日～29日)</p> <p>世界選手権大会兼世界女子選手権大会(メルボルン)、男子10名、女子7名参加。</p> <p>59kg級池畑大、日本新を出す6位に終わる。女子70kg級長谷場久美3年連続銀メダル獲得。(11月12日～21日)</p>	<p>第1回東アジア競技大会(上海)に日本選手団357名参加、金メダル25個。(5月9日～18日)</p> <p>JOC、ジャパン・オリンピック・コーチング株式会社設立。(6月23日)</p>
1994年 (平成6)	<p>ブルガリア、ナショナルコーチ、ヤンコルセフ再招聘す。(5月～10月)</p> <p>第12回アジア競技大会(広島)開催。男子10名、女子9名参加、男子銀1銅2、女子銀1銅1で終わる。(10月2日～16日)</p> <p>桜井勝利協会専務理事、AWF副会長に就任。(12月)</p>	<p>第17回オリンピック冬季競技大会(リレハンメル)に日本選手団110名参加、金メダル1個。(2月12日～23日)</p> <p>第12回アジア競技大会(広島)に日本選手団1,017名参加、金メダル64個。(10月2日～16日)</p> <p>中央アジア5ヶ国が初参加、カンボジア20年ぶり参加等、史上最大規模の大会となる。</p>

年次	協会事項	参考事項
1995年 (平成7)	<p>IWF、アンチドーピング対策で各NFナショナル選手の登録義務を通告。(1月)</p> <p>IWF、アトランタ・オリンピック大会参加資格を世界選手権大会及び地域大陸大会の同別対抗成績で付与する旨各NFへ最終通告。(1月)</p> <p>第10代会長、林克也就任。(3月)</p> <p>第1回アジア女子ジュニア選手権大会(中国)始まる。選手4名参加。(8月22日～27日)</p> <p>世界選手権大会(五輪世界予選会)兼世界女子選手権大会(中国・広州)、男子10名、女子5名参加。五輪予選の男子は同別対抗で14位、7名のオリンピック出場資格を獲得す。女子46kg級二柳かおりがジャーク82kgのジュニア世界記録で6位。(11月17日～26日)</p>	<p>第18回ユニバーシアード夏季大会(福岡)に日本選手団372名参加。</p> <p>福岡大会は162の国及び地域参加の史上最高の規模となる。(8月23日～9月3日)</p> <p>昭和21年、近畿地方を中心に開催した国民体育大会は、福島団体で50回となる。(10月14日～19日)</p>
1996年 (平成8)	<p>第28回アジア選手権大会(アトランタ五輪予選)兼第9回アジア女子選手権大会(千葉八千代市)開催。ドーピング検査は、IWF指定機関、ドイツ・ケルン市で実施、ドイツに空輸で検体を送ぶ。(4月4日～9日)</p> <p>ジュニア世界選手権大会兼世界女子選手権大会(ワルシャワ)に男子7名、女子5名参加、男子54kg級山本亮3位銅メダル、女子59kg級高橋百合子銅メダル。(5月3日～11日)</p> <p>第26回オリンピック競技大会(アトランタ)に選手7名参加、59kg級池畑大日本記録で健闘、メダルに一步及ばず4位。(7月19日～8月4日)</p> <p>日、韓、中3ヶ国フレンドシップトーナメント、千葉市で開催。(9月15日～16日)</p> <p>IWF総会(アテネ)で、2000年シドニー・オリンピック大会、女子競技参加確認、五輪女子参加に伴う階級数、体重区分が検討委員会と特別コミッションによって作業始まる。(12月10日～11日)</p>	<p>第26回オリンピック競技大会(アトランタ)に日本選手団449名参加、金メダル3個。(7月19日～8月4日)</p> <p>IOC理事会(メキシコ)、2000年シドニー大会女子ウエイトリフティング競技種目承認。(11月)</p>



96年第9回(女子)、第27回(男子)アジア選手権  
タマス・アイアン事務局長と握手する桜井勝利専務理事



アジア選手権表彰式、贈呈者林克也会長

## 階級及び種目の変遷

1896年 (明治29)	第1回アテネ・オリンピック大会(体操競技の1種目として実施) 階級：階級区分なし 種目：片手ジャーク・両手ジャークの2種目
1904年 (明治37)	第3回セントルイス・オリンピック大会(体操競技の1種目として実施) 階級：階級区分なし 種目：片手ざし(ダンベル)・両手ジャークの2種目
1920年 (大正9)	第7回アントワープ・オリンピック大会(正式種目として開催) 階級：5階級 フェザー級(60kg) ライト級(67.5kg) ミドル級(75kg) ライトヘビー級(82.5kg) ヘビー級(82.5kg以上) 種目：片手ジャーク・両手ジャーク・片手スナッチの3種目
1924年 (大正13)	第8回パリ・オリンピック大会 階級：5階級 種目：片手ジャーク・両手ジャーク・片手スナッチ・両手スナッチ・両手ブレスの5種目
1928年 (昭和3)	第9回アムステルダム・オリンピック大会 階級：5階級 種目：両手ブレス・両手スナッチ・両手ジャークの3種目に整理
1936年 (昭和11)	第11回ベルリン・オリンピック大会 階級：5階級 種目：両手ブレス・両手スナッチ・両手ジャークの3種目に整理 第1回全日本選手権大会 I Fの階級：51kg級、54kg級、57kg級、60kg級、67.5kg級、75kg級、82.5kg級、+82.5kg級 国内区分：最軽量級(60kg) 軽量級(67.5kg) 中量級(75kg) (51・54・57・60)
1937年 (昭和12)	第2回全日本選手権大会(明治神宮大会と兼ねる) 階級：8階級設定(I Fの階級と揃える) 51kg級、54kg級、57kg級、60kg級、67.5kg級、75kg級、82.5kg級、重量級
1939年 (昭和14)	第1回全日本重量挙げ目別競技大会 種目：両手ジャーク・片手ジャーク・ジャーク回数・依差し上げ回数・依差し上げ持久時間 階級：両手ジャーク・片手ジャークのみ階級設定あり(60kg以下・60kg以上)
1941年 (昭和16)	I Fの階級：51kg級、56kg級、60kg級、67.5kg級、75kg級、82.5kg級、+82.5kg級
1948年 (昭和23)	第14回ロンドン・オリンピック大会 階級：6階級 バンタム級(56kg)、フェザー級(60kg)、ライト級(67.5kg)、ミドル級(75kg)、ライトヘビー級(82.5kg)
1951年 (昭和26)	I Fの階級：フライ級(51kg) バンタム級(56kg) フェザー級(60kg) ライト級(67.5kg) ミドル級(75kg) ライトヘビー級(82.5kg) ミドルヘビー級(90kg) ヘビー級(90kg以上)
1952年 (昭和27)	第15回ヘルシンキ・オリンピック大会 階級：7階級 バンタム級(56kg) フェザー級(60kg) ライト級(67.5kg) ミドル級(75kg) ライトヘビー級(82.5kg) ミドルヘビー級(90kg) ヘビー級(90kg以上)
1958年 (昭和33)	I Fの階級：フライ級(52kg) バンタム級(56kg) フェザー級(60kg) ライト級(67.5kg) ミドル級(75kg) ライトヘビー級(82.5kg) ミドルヘビー級(90kg) ヘビー級(90kg以上)
1968年 (昭和43)	I F総会で8階級から9階級に階級増を決定 フライ級(52kg) バンタム級(56kg) フェザー級(60kg) ライト級(67.5kg) ミドル級(75kg) ライトヘビー級(82.5kg) ミドルヘビー級(90kg) ヘビー級(110kg) スーパーヘビー級(110kg以上)
1969年 (昭和44)	国内：スーパーヘビー級(110kg以上)は、当分の間日本では実施しない。
1972年 (昭和47)	第20回ミュンヘン・オリンピック大会 階級：9階級 フライ級(52kg) バンタム級(56kg) フェザー級(60kg) ライト級(67.5kg) ミドル級(75kg) ライトヘビー級(82.5kg) ミドルヘビー級(90kg) ヘビー級(110kg) スーパーヘビー級(110kg以上) 種目：I F総会でブレス種目の廃止決定
1977年 (昭和52)	階級の呼称の変更(10階級となる) 52kg級 56kg級 60kg級 67.5kg級 75kg級 82.5kg級 90kg級 100kg級 110kg級 +110kg級

<p>1980年 (昭和55)</p>	<p>第22回モスクワ・オリンピック大会 階級：10階級 52kg級 56kg級 60kg級 67.5kg級 75kg級 82.5kg級 90kg級 100kg級 110kg級 +110kg級 国内でも、+110kg級を実施する</p>
<p>1987年 (昭和62)</p>	<p>I F女子の新設(9階級) 44kg級 48kg級 52kg級 56kg級 60kg級 67.5kg級 75kg級 82.5kg級 +82.5kg級 国内でも直ちに実施する</p>
<p>1993年 (昭和5)</p>	<p>I F階級の区分の変更(男子：10階級) 54kg級 59kg級 64kg級 70kg級 76kg級 83kg級 91kg級 99kg級 108kg級 +108kg級 I F階級の区分の変更(女子：9階級) 46kg級 50kg級 54kg級 59kg級 64kg級 70kg級 76kg級 83kg級 +83kg級</p>

## (社)日本ウエイトリフティング協会歴代会長・理事長・専務理事

年度	会長	副会長	理事長・専務理事 (昭49年まで)(昭50年より)
昭和12年-13年	三島 通陽	大谷 武一	
13年-15年	三島 通陽	大谷 武一	
21年	三島 通陽	桑原用二郎、京極 高鋭	井口 幸男
22年-23年	三島 通陽	桑原用二郎、京極 高鋭	井口 幸男
24年-25年	小西 英雄	桑原用二郎、京極 高鋭	井口 幸男
26年-27年	小西 英雄	桑原用二郎、京極 高鋭	井口 幸男
28年-29年	小西 英雄	京極 高鋭	井口 幸男
30年	大谷米太郎	京極 高鋭	井口 幸男
31年	加藤 高歳	京極 高鋭	井口 幸男
32年-33年	川名 勇	京極 高鋭	井口 幸男
34年	矢下 治蔵	京極 高鋭	井口 幸男
34年-35年	西川 正一	京極 高鋭	井口 幸男
36年-37年	西川 正一	京極 高鋭	井口 幸男
38年-39年	西川 正一	京極 高鋭、井口 幸男	赤嶺 茂
40年-41年	西川 正一	京極 高鋭、井口 幸男	井口 幸男
42年-43年	西川 正一	京極 高鋭、井口 幸男	井口 幸男
44年-45年	西川 正一	京極 高鋭、井口 幸男	井口 幸男
46年-47年	西川 正一	京極 高鋭、井口 幸男	野中 義治
48年-49年	西川 正一	京極 高鋭、井口 幸男	野中 義治
50年-51年	西川 正一	馬場 太郎、右島 四郎、佐藤 育秀	野中 義治
52年-53年	西川 正一	中野 次男、佐藤 育秀、赤坂 俊夫、出野 博	林 克也
54年	小宮山英歳	中野 次男、佐藤 育秀、赤坂 俊夫、出野 博	林 克也
54年-55年	小宮山重四郎	中野 次男、赤坂 俊夫、出野 博	林 克也
56年-57年	小宮山重四郎	中野 次男、赤坂 俊夫、出野 博	林 克也
58年-59年	小宮山重四郎	中野 次男、赤坂 俊夫、出野 博	林 克也
60年-61年	小宮山重四郎	中野 次男、赤坂 俊夫、出野 博	林 克也
62年-63年	小宮山重四郎	中野 次男、赤坂 俊夫、出野 博	林 克也
平成元年-2年	小宮山重四郎	林 克也、清藤 六郎、仰木 重利、赤坂 俊夫、出野 博	林 克也
3年-4年	小宮山重四郎	林 克也、清藤 六郎、仰木 重利、赤坂 俊夫、出野 博	桜井 勝利
5年-6年	小宮山重四郎	林 克也、清藤 六郎、仰木 重利、赤坂 俊夫、出野 博	桜井 勝利
7年-8年	林 克也	清藤 六郎、仰木 重利、赤坂 俊夫、出野 博、三宅 義信	桜井 勝利

## 平成8年度(社)日本ウエイトリフティング協会役員

会長	林 克也				
副会長	清藤 六郎	仰木 重利	赤坂 俊夫	三宅 義信	
専務理事	桜井 勝利				
常務理事	篠宮 稔	関口 脩	細谷 治朗	三宅 義行	三木 功司
	小平 紀生				
理事	大内 仁	菊地 俊美	坂上 勝美	佐野 隆	塩手 満夫
	玉川 真男	野牧 一雄	八田 信之	継岡 正章	
監事	武田 恒哉	西川正次郎			

正会員	〈北海道〉 稲岡 脈雄	〈青森〉 清藤 六郎	〈岩手〉 角掛 宜夫	〈宮城〉 遠藤 嘉博
	〈秋田〉 佐藤 育秀	〈山形〉 田中 隆三	〈福島〉 小松 鴻一	〈茨城〉 西川正次郎
	〈栃木〉 葛貫 宏平	〈群馬〉 望月 豊司	〈埼玉〉 桜井 勝利	〈千葉〉 山口 俊章
	〈東京〉 松尾 謙資	〈神奈川〉 森 優	〈山梨〉 村田 一郎	〈新潟〉 徳橋 政実
	〈長野〉 村上 裕史	〈富山〉 菅沼 義清	〈石川〉 長界 幸男	〈福井〉 小林 良雄
	〈静岡〉 井出 哲夫	〈愛知〉 高橋 力	〈岐阜〉 大橋 弘實	〈三重〉 岩城 甚吉
	〈滋賀〉 木村新太郎	〈京都〉 新井田耕三	〈奈良〉 北 実	〈大阪〉 鈴木 裕之
	〈兵庫〉 小高 正宏	〈和歌山〉 高橋 次夫	〈鳥取〉 吉田 達男	〈島根〉 佐々木雄三
	〈岡山〉 田中 博文	〈広島〉 日吉富英夫	〈山口〉 寺本 繁次	〈香川〉 花城 正樹
	〈徳島〉 藤原 八郎	〈愛媛〉 都築 清	〈高知〉 梅田 正幸	〈福岡〉 守 昌宏
	〈大分〉 佐藤 文生	〈佐賀〉 前田 知弘	〈熊本〉 村本 鉄也	〈長崎〉 篠崎 義雄
	〈宮崎〉 児玉 雅亘	〈鹿児島〉 淵脇 正三	〈沖縄〉 佐久本嘉春	〈学連〉 谷川 高
事務局	安藤かほる	藤沢登紀子		